

蛇紋岩にふとん掛けて（四）

ところで、その物体は一体何だろうか。石もしくは岩であることには違いないであろうが、そんなところの路傍の石とはわけが違うよ。おあ姉さんにおあ兄さんよ。何しろ、台座の上に鎮座されている。しかもその台座は、何やら高級な黒檀や紫檀の様な材質であり、その石（岩）の凹凸や曲線直線にピッタリとはまる様に緻密に加工が施されており、正に吸い付いているような印象である。

「観賞用 石」で検索してみた。「水石」なる初めて見るキーワードが目飛び込んできた。再度「水石」で検索してみた。ああなるほど、そういう世界がこの国にあったんだ。そのような趣味の人は身近にいないし、いなかった。全く知らなかった。

真剣にその文化・趣味に取り組んでいらっしゃる方々には申し訳ないが、年配の男性の文化・趣味だと思えた。悪く言えば、ジジ臭い文化・趣味となるのか。

それでも、眼前のこの物体には見られる対象（人や猫）の立場の違いや捉え方の違いに関係なく、すばらしさや、威厳や、奥行きが深さが、十分に伝わってくるのである。

ズバリはっきり言って、「水石」なる文化・趣味は自分にとっては全く容認するところではないのだが、この石に限っては別。ますます興味が沸いてきた。

「ねえ。よもたん。この石どう思うよ」

よもたんは、ソファーに山積みされた雑誌と新聞袋の間のフリース置き場にある嫁さんのフリースの上に爆睡中である。寝子は寝るのが仕事。しかもヘソ天。もうこの岩石には何ら警戒心も恐怖心もなく自由奔放に寝ている。そんな呑気な寝姿に少々苛立ちつつも、これが「何か」は気になる。よもたんにとっては、今はもう何でもない只のモノ。

それでも、その種類は知りたいし、認識しておきたい。ただの岩石とはいかない。

図書館へ出かけた。この岩石の何たるかを調べに。搜したり、聞いたりしたが、対象の同定に至る決め手となる資料は見つからなかった。しかし、大凡の見当はついてきた。

専門家に尋ねようと探したが、思い切ったのアプローチはしなかった。蒐集家を目指しているのではないし、その趣味に浸かりたいとも思わない。只、これが何か知りたいだけである。同定する意義や必要性は希薄となったが、ひょっとしてが脳裏をよぎる。

「いったい、いくら位なんだろう」いやらしさが滲み出てしまった。

またWeb上を彷徨った。それが「何か」の結論を求めようと。一方「なんでこれがここにあるのか」と原点に戻るような命題も脳裏を何度も過った。そうやって行きつ戻りつを繰り返しながらも至った。結論は蛇紋岩。それを否定する論拠や画像は自分の意識から無くなった。専門家による同定は不要。自分自身が納得する同定。それでいいんだ。